



# 猪川地区

猪川地区は、津波被害を被らなかつたことから、災害公営住宅の整備等に伴い多くの移転者を受け入れることになりました。

地区住民は、新たに移転してくる人たちと地域との関わり方について何度も会議を開き、行政区の扱いなどさまざまな話し合いを行いました。

現在は、お正月の権現様、餅つき、花見やバーベキューなど、新住民との交流を深めるさまざまな取り組みなども実施しており、災害時の「共助」のあり方の一つとして今回の経験の伝承が重要となっています。また、高齢者が多くなる社会情勢を踏まえ、何が求められているのかを把握しながら、高齢者向けの地域づくり・まちづくりに向けた取り組みを進めています。

復興事業最盛期には、国道45号周辺が頻繁に渋滞し、世帯数が増えたこともあり、通勤などの車も増えています。

猪川地区は、震災直後に近隣地域に商業施設が立地したことにより、活気が高まっている地域となっています。



市内最大規模の長洞仮設団地



災害公営住宅(長谷堂東団地)



新たな住宅が立ち並ぶ



仮設ガレキ置き場(旧赤崎小)



高台に移転した赤崎小学校



高台に移転した赤崎中学校



# 赤崎地区

小学校、中学校が共に被災した赤崎地区では、被災した校庭のガレキを住民が主体となって取り除き、地域の運動会や野球大会など避難生活に潤いをもたらす場所として活用していました。

一方、復興事業を進める上で、各地から出る残土の受け入れや搬出を行うための「土砂仮置き場」が中赤崎地区および永浜・山口ふ頭に設置されました。

これにより、現在でも道路工事が続いている状況となっています。

そうした中、「復興市」、「スポーツ交流の場」、「防災交流の場」の3つを柱とした「中赤崎まちづくり構想2020」を取りまとめました。

小・中学校が被災するという甚大な被害を被った赤崎地区ですが、平成28年度に新しい学校が高台に再建されました。

永浜地区でも地区住民が中心となって独自のまちづくりの検討を続け、平成28年度に「止まり木広場」、「水辺の活用」などを中心とした提言書を市に提出しています。



ボランティア学生の拠点(立根地区公民館)



災害公営住宅(下欠東アパート)



「男の料理教室」開催



# 立根地区

立根地区は、震災後に大きく変わりました。

住宅だけでなく、スーパーマーケットも移転・開業しています。

そうしたことから、朝晩の交通量が増え、三陸自動車道の大船渡IC周辺をはじめ渋滞が頻発するようになりました。

地区内に災害公営住宅が2棟建設され、当初は公民館でもさまざまな気遣いをしてきましたが、現在は、お互い気兼ねない関係づくりができています。

立根地区公民館では、全国各地から被災地支援のボランティアに訪れる学生に宿泊の場を提供してきました。

学生たちは、町民運動会への参加や、地区住民のお宅に招かれるなど住民との交流を深めてきました。

学生たちは、ボランティアの一環として「傾聴」も行っており、被災者の声を聴いて回っていることについて、地域からは「若者が被災地を思う気持ちになってくれることが一番の復興になる」と感謝の声が上がっています。



# 蛸ノ浦地区

蛸ノ浦地区では、震災発生直後、全戸に避難命令が出され、全員が公民館に避難しました。誰も経験したことのない状況に、自主防災組織が中心となって対応にあたりました。同じ地区内でも被災の程度が異なるため、人間関係を円滑に保つ上で困難な場面もありましたが、「お茶っこ会」の開催など交流の機会を設けることで、人間関係の再構築が図られました。高台移転では、「差込型」の移転が可能になった一方で、本格的な生活再建に移行するにあたり、みんながバラバラになってしまい寂しいという意見もありました。

今後は、自主防災組織がどのように活動・機能しているのかを把握、活性化させることが望まれています。

また、震災前と比べて、地区内の放送設備や回覧板といった伝達手法が機能しなくなっているという実情もあることから、災害時に重要となる伝達手段を、新たな住まい・集落に合わせて再構築していくことも課題の一つとなっています。



防災集団移転団地



防潮堤を整備



「そよ風サロン」で交流